筑摩世界文學大系

61

トーマス・マン

佐藤晃一訳

筑摩書房

筑摩世界文學大系 61

昭和四十六年九月二十五日　初版第一刷発行

トーマス・マン

訳者　佐藤晃一

発行者　竹之内静雄

発行所　東京都千代田区神田小川町二ノ八
筑摩書房
郵便番号一〇一―九一
電話東京(二九一)七六五一
振替口座東京四一二三

印刷　三晃印刷　製本　鈴木製本所

落丁本・乱丁本はお取替いたします

(分類) 0397 (製品) 20661 (出版社) 4604

目次

魔の山　佐藤晃一訳　5

トーマス・マン——神話と理性　W・トロイ　出淵博訳　533

解説　円子修平　552

年譜　559

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

トーマス・マン

魔の山

まえがき

わたくしたちが物語ろうと思うハンス・カストルプの物語、――これは、彼のために物語るのではなくて（というのも、いずれは読者にもわかるように、彼は、人好きはするが単純な青年にすぎないからである）、非常に物語る価値があるように思われる物語そのもののために物語る（とはいうものの、これが彼の物語であって、誰にしても自分の思いどおりの物語がその身にもちあがるわけのものでないという事情は、やはりハンス・カストルプのためにことわっておかなければならないと思う）のだが、この物語は非常にむかしのことで、いわばもうすっかり歴史の錆に蔽われているものなのだから、どうしても最大級の過去で物語らなければならないのである。

これは、物語にとって不利なことではなくて、むしろ有利なことであろう。物語というものは過去のことでなければならないからである。そして、過去のことであればあるほど、物語の性質にもかなってくるし、囁くような声で過去形を呼び出す物語り手にとっても都合がよくなる、と言えるように思う。わたくしたちの物語は、今日の人間、とりわけ今日の物語作者たちと同じように、実際の年数よりもはるかに年を取っているのだが、それは日数では勘定できないし、その年齢にしても、地球の公転回数で計算するわけにはいかない。ひとことで言えば、この物語は、どのくらい過去のものかという過去性の程度を、実際には時間のおかげで獲得するのではないのだ、――こう言って、時間というこの不可思議な要素の問題性や独特な二重性を、ついでながらここでそれとなく指示しておく。

しかし、明瞭な事情をわざと曖昧にすることはやめよう。わたくしたちの物語が非常に過去の物語だというわけは、それがある転回点以前に起こるものだからである、すなわち、わたくしたちの生活や意識を深刻に分裂させる変化が生じた境界線以前に起こるからである、というか、または、なるべく現在形を避けて言うと、それが起こったのは、以前のこと、かつてのこと、昔のこと、世界大戦前の世界でのことで、あの大戦の開始とともに非常に多くのことが始まったのだが、それらのことは今日にいたるもまだ始まるということをほとんどやめていない。というようなわけで、これは、ずっと昔の物語ではないにしろ、昔の物語なのである。しかし、物語の過去的性格というものは、物語が「昔」のものであればあるほど、いっそう深く、いっそう完全で、いっそう童話ふうなのではあるまいか？　その上、わたくしたちの物語は、内的性質から言うと、その他の点でも何かと童話に関係があるかもしれない。

わたくしたちはこの物語を詳しく話すことにする、精密に徹底的に話すことにする、――というのも、物語の面白さや退屈さが、物語の要求する時間や空間に左右されたというためしがあるだろうか？　むしろ、わたくしたちは綿密すぎるという悪評など恐れないで、徹底的なものだけがほんとうに面白いのだという考えにつきたい。

そういうわけで、この物語の作者は、ハンスの物語を転瞬の間に語り終えるというわけにはいかないだろう。一週間の七日では足りないだろうし、七ヵ月でも間に合わないかもしれない。一番いいのは、この物語にまきこまれているあいだに地上の時間がどのくらい経過するか、それを作者が前もって予定しないことである。まさか七年もかかることはあるまい！

それでは始めることにしよう。

第一章

到着

ひとりの単純な青年が、夏の盛りに、故郷のハンブルクからグラウビュンデン州のダヴォス・プラッツに向かう旅に出た。人を訪ねるための旅で、三週間の予定であった。

ハンブルクからダヴォスまでというと、それは遠い旅で、そもそも三週間というような短い滞在期間の割には遠すぎる旅である。途中はいくつかの国々を通って、山をのぼり山をくだり、南ドイツの高原からボーデン湖のほとりへおりていって、この湖の躍る波を越え、かつては底無しと言われていた深淵を船で渡ってゆくのである。

それまでは大まかに直線的にはかどってきた旅が、ここから先は紆余曲折するようになる。何度も待たされて、いろいろと回りくどい目に会う。スイス領のロールシャッハ町でふたたび汽車に乗るのだが、それは差しあたりラントクヴァルトというアルプス山中の小さな駅まで行くだけで、そこで汽車の乗換えをしなければならないのである。風の吹きさらす、あまり景色のよくないところで相当待たされてから、こんどは狭軌鉄道に乗りこむのだが、小型ながらに非常な牽引力を持っているらしい機関車が動きはじめる瞬間に、この旅のほんとうに冒険的な部分がはじまる、つまり、急勾配の執拗な上りがはじまって、いっかな終わる気配を見せない。というのも、ラントクヴァルトは比較的にまだ中くらいの高さにある駅で、ここからいよいよ嶮しくそば立つ岩道伝いに一生懸命、アルプスの奥へのぼってゆくのだからである。

ハンス・カストルプ――というのがこの青年の名である――は、灰色のクッションを張った小さな車室にただひとりで腰をかけて、格子縞の旅行毛布にくるまっていた。横には、育ての親である叔父のティーナッペル領事（この名前も早速ここに出しておく）からもらった鰐皮の手提鞄が置いてあって、掛け釘には彼の冬外套がかかったまま、ぶらぶら揺れている。彼はガラス戸を閉めた窓辺に腰をかけているのだが、午後になってから次第に冷えてくるので、温室育ちで甘やかされてきた彼は、絹地に加工した、流行型のゆったりとした夏外套の襟を立てていた。腰掛の彼の横には、『大洋汽船』という表題の仮綴本が置いてある。旅の初めのうちは、彼はときどきこの本をのぞいて勉強したのだが、いまはそこに置いたままかえりみないので、喘ぎ喘ぎのぼってゆく機関車から吐き出される煙が流れこんできては、その表紙を煤でよごすのであった。

旅に出てから二日もたつと、わたくしたち人間――ことにまだ生活にあまりしっかりと根をおろしていない青年――は、自分の義務、利害、心配、見込みなどと呼んでいたいっさいのもの、つまり、自分の日常生活から縁遠くなってしまう。それも、停車場へ乗りつける馬車のなかで夢想した程度をはるかに越えて縁遠くなるのである。わたくしたちと故郷とのあいだに旋回しながら、逸走しながら、くりひろがってゆく空間は、一般に時間だけが持つものと思われているいろいろな力を発揮してくる。空間も時々刻刻に心的変化を生ぜしめるので、その変化は時間によって起こる変化によく似ているが、ある意味ではそれ以上のものである。時間と同じように空間も忘れさせる力を持っているが、空間の忘却作用は、人間をいろいろな関係から解放して、自由な本然の状態へ置き換えるというやり方である、――じつに、空間は杓子定規な俗物をさえ転瞬の間に放浪児のような人間にしてしまうのだ。時の流れは忘却の川だと言われる。しかし、旅の空気もそれに似た飲物で、効き方は時の流れほど徹底的でないにしても、そのかわりにいっそう速かに効く。

ハンス・カストルプもこれと同じようなことを経験した。彼には、この旅行をとくに重大なものと考えたり、深い関心を寄せたりするつもりはなかったのである。むしろ彼の考えは、どうせすませなければならないものなんだから、さっさとこの旅をすませてしまおう、発ったときとすこしも変らない人間で帰ってこよう、そして、しばらく中止しなければならなかった生活を、中止したその場所からまたはじめることにしよう、というのであった。昨日まではまだ

全然いつもの考えごとの埒内にとどまっていた彼は、最近すませたばかりの試験のことや、真近に迫っているトゥンダー・アンド・ヴィルムス商会（造船、機械製造、ボイラー製作の会社）の実習につくことなどに心を奪われて、これから三週間の先を、彼のような気質の人間にできる精いっぱいの痺れを切らしながら待っていたのである。ところが、彼はいま、あたりの状況が自分の完全な注意力を要求するような、これはいい加減にしてはおけないというような気持になっていた。これまでまだ一度もその空気を呼吸したことのない高層、他とは完全におもむきの違う、独特に稀薄で乏しい生活条件が支配しているという高層へ、こうして引きあげられてゆくこと――それが彼を興奮させて、その心に一種の不安を満たしはじめた。故郷や日頃の秩序は、単に遠く後方へ離れてしまったばかりでなく、わけても彼の脚下何千丈という下方へ遠ざかってしまったのに、しかも彼は相変らず上へ上へとのぼりつづけているのである。故郷や日頃の秩序と未知のものとの中間にただよいながら、彼は、上ではいったいどんなことになるのだろうかと、自分で自分に尋ねてみた。海抜わずか数メートルのところで呼吸するように生まれついて、それに慣れてきた自分が、せめて二、三日のあいだ中くらいの高地にとどまってからならともかく、突然こういう極端な高層へ運びあげられるのは、賢明なことでもないだろうし、身体のためにもよくないことではあるまいか？　早く目的地に着きたいものだ、と彼は思った。上へ着いてしまえば、いずこも同じ生活があって、いまよじ登っているときのように、不適当な境地にいることを感じさせられずにすむかもしれない、と考えたのである。窓の外を見ると、汽車は狭い間道をうねりながら進んでいた。前方の車輛が見えるし、喘ぎながら褐色や緑色や黒色の煙の塊りを吐き出している機関車や、煙の塊りの飛び散るのが見える。右手の谷底には水のざわめく音が聞こえ、左手には黒ずんだ赤針樅が、岩塊のあいだから石のような感じの灰色の空にむかって伸びあがっていた。まっ暗なトンネルがいくつかつづいてから、ふたたび明るみに出ると、底に村落を点在させた広い谷間がひらけてきた。その谷間が閉じると、新しい狭間がいくつもつづいて、その裂け目や割れ目にはまだ雪が残っていた。貧弱な小駅小駅で幾度も停車する。これらの小駅は行きどまりの駅で、そこを離れた汽車はこれまでとは逆の方向へ走る。そのため、どう走っているのかわからなくなるし、もはや方角も思い出せなくなって、頭が混乱させられる。さながら神聖な幻想のようにそびえ立つアルプスの連峰は、汽車が昇りを重ねて山ふところにはいってゆくにつれて、雄大な遠望をくりひろげるのだが、狭い道が曲がりくねってくると、畏敬の気持を抱いて見ている人の眼から、ふたたび隠れてしまう。ハンス・カストルプは、濶葉樹地帯もすでに過ぎてしまったが、おそらくは鳴禽地帯も過ぎたのではあるまいか、と考えた、そして、こんなぐあいにいろいろなものが無くなって乏しくなることを考えたとき、彼は軽い目まいと吐き気とに襲われて、二秒間ほど手で眼を蔽っていた。それはすぐに回復した。見ると、昇りが終わって、すでに狭間の頂上に出ている。汽車はいま平坦な谷底を気楽そうに走っていた。

八時頃だったが、日はまだ暮れていなかった。遠景に湖水がひとつ現われた。水は灰色である。その岸に沿って赤針樅の林が黒々と周囲の山へ這いあがり、はるか上のほうではまばらになって、ついに姿を消し、そのさきは霧のかかった裸の岩だらけになっていた。汽車は小さな駅でとまった。窓の外の呼び声を聞くと、これがダヴォス村の駅だとわかったので、ハンス・カストルプは、間もなく目的地に着くのだな、と思う。すると、突然、彼の耳もとで、従兄のヨーアヒム・チームセンの「やあ、君、さあ降りたまえ」という、悠長なハンブルクなまりの声が聞こえた。外を見ると、当のヨーアヒムがプラットホームに立っていたが、焦茶の夏外套を着て、頭には何もかぶらず、これまでにない健康そうなようすをしている。ヨーアヒムは笑って、ふたたび言った、

「出てきたまえよ、君、何も遠慮することはない！」

「しかし、まだ着いたわけじゃないだろう」と言ったハンス・カストルプは、当惑のままやはり腰をかけている。

「いや、着いたんだよ。これがダヴォスの村なのさ。療養所へ行くには、ここからのほうが近いんだ。馬車を用意してきたよ。さあ、荷物を

よこしたまえ」

そこで、到着やら再会やらに興奮したハンス・カストルプは、笑ったり、まごついたりしながら、ヨーアヒムに手提鞄や冬外套、格子縞の旅行毛布にステッキに傘、最後に『大洋汽船』まで差し出した。それから彼は狭い廊下を走り抜けて、プラットホームに飛びおりる。そして、従兄と本式に、いわばいま初めて対面の挨拶をかわしたのだが、それは冷静で控え目な作法を守る人々のあいだでおこなわれるような、仰々しいところのない挨拶だった。妙な話だが、このふたりは、心情のあふれすぎをはばかるというだけの理由で、以前から名前を呼び合うことを避けていたのである。しかし、姓を呼び合うわけにもいかなかったから、君とだけ呼び合うことにしていた。これがこの従兄弟同士の長年の習慣だったのである。

仕着せを着て、モール付きの帽子をかぶった男がひとり、従兄弟同士の――チームセン青年の姿勢は軍隊式だったが――そそくさと、すこし照れくさそうに握手するようすを見ていたが、やがて近づいてきて、ハンス・カストルプに、荷物の預り証をお渡し願いたいと乞う。この男は国際サナトリウム「ベルクホーフ」の門番だったが、おふたりにはここからまっすぐ馬車で夕食に急いでもらうことにして、自分は街の駅から新来のお客の大きなトランクを取ってくることにしたい、と言うのであった。その男はひどくびっこを引いていたので、ハンス・カストルプがまずヨーアヒム・チームセンに問いかけたことは、こうだった、

「あれは戦争の廃兵かね？　なんであんなにびっこを引くんだい？」

「いや、これはどうも！」とヨーアヒムはすこしうらめしそうな口調で答えた。「戦争の廃兵か！　あの男は膝が悪い――いや、悪かったんだよ、それで膝頭の骨を摘出してもらったわけさ」

ハンス・カストルプはできるだけ早く頭をはたらかせた。「ああ、そうか！」と、彼は歩きながら頭をもたげて、ちらとあたりを見まわしながら言った。「それにしても君は、まだ悪いところがあるなどと僕をだますつもりじゃあるまいね？　君はもう軍刀の飾り紐でもつけて、演習から帰ってきたばかりとでもいうようなようすだよ」そう言って彼は横から従兄を見つめた。

ヨーアヒムは彼より脊丈も高いし肩幅も広くて、青春の力の象徴とでも言おうか、軍服を着るために生まれついた人間のように見えた。金髪の多い彼の故郷ハンブルクでよく見受けられる褐色の濃い型のひとりで、たださえ浅黒い顔の肌が日焼けのためにほとんど青銅色に焦げている。大きな黒い眼をして、恰好のよい、ふっくらとした口の上に黒いチョビひげを貯えた彼は、これでもし耳さえ出っ張っていなければ、美男子とも言えたであろう。ある時期まではこの耳が彼の唯一の悩みの種、人生苦の種であった。いまでは別の心配事を抱えている。ハンス・カストルプは言葉をつづけた、

「僕といっしょにすぐ山をおりられるんだろうね？　ほんとに、なんの差しさわりもなさそうに見える」

「君といっしょに、すぐだって？」とたずねながら、従兄はハンス・カストルプのほうへ大きな眼を向けた。いつもおだやかな眼であったのが、この五カ月のあいだにいくらか疲れたような、いや、悲しそうな色を帯びてきている。

「すぐって、いつさ」

「うん、三週間したらさ」

「ああ、そうか、君はもう家へ帰ることを考えているんだな」とヨーアヒムが答えた。「まあ、待ちたまえ、いましがた着いたばかりじゃないか。三週間だなんて、この上の僕たちにはもちろん時間とは言えないくらいのものなんだが、ここを訪ねてきて、三週間しかいないという君からみれば、それは大した時間ということになる。まず気候に慣れることだ。それがどうして容易なことじゃない、いまにわかるよ。それに僕たちのところで風変りなのは、気候だけじゃないんだ。ここではいろんな新しいものが眼につくよ、まあ見ていたまえ。それから、僕のことだって、君が言うようにそうすらすらとはいかんよ、君、『三週間したら家へ帰る』なんていうのは、それは下界の考えさ。僕の顔はなるほど褐色になっているが、しかし、これはおもに雪焼けのせいなんで、ベーレンスの口癖のとおり、大した意味はないんだよ。最近の総診のときだって、彼は、もう半年はまあほぼ確実にかかるだろうと言ったんだからね」

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

「半年だって？　本気の話かい？」とハンス・カストルプは叫んだ。彼らは、納屋よりはいくらかましだとでもいうくらいな停車場の建物の前で、そこの石だらけな広場に待っていた黄色い二輪馬車に乗りこんだところであったが、二頭の栗毛が引きはじめたとき、ハンス・カストルプは憤慨のしぐさに、固いクッションの上であっちを向いたり、こっちを向いたりした。「半年だって？　君はもう半年近くもここにいるじゃないか！　誰にしたってそうふんだんに時間なんかありゃしないよ――！」

「うん、その時間だがね」と言ったヨーアヒムは、従弟の正直な憤慨にはかまわずに、前を向いたまま幾度もうなずいた。「ここの連中は普通の時間なんかなんとも思っていやしない、と言っても、とても信じられないだろうがね。三週間なんて彼らにすれば一日と同じことなんだ。いまにわかるよ。何もかにものみこめてくるよ」と言ったあとで、彼はこうつけ加えた、「ここにいると概念が変ってくるからね」

ハンス・カストルプは横から絶えず従兄をながめていた。

「それにしても君の回復ぶりはすばらしいね」と、彼は頭をふりながら言った。

「うん、君はそう思うかい？」とヨーアヒムは答えた。「そうだろう、僕だってそう思うんだ」と言った彼は、背を高くおこしてクッションの上に反りかえったが、すぐまたもっと斜めなりの姿勢に戻った。「前よりは良くなったよ」と彼は説明した、「しかし、まだ健康とは言えないね。前にラッセルが聞こえた左の上は、いまではすこし荒い音がするだけで、これはそれほど悪くないんだが、下のほうはまだとても荒い音がする、それから、第二肋間にも雑音があるんだ」

「えらく博学になったもんだな」とハンス・カストルプは言った。

「うん、なんとも結構な博学さ。なろうことなら軍務について、こんな博学なぞけろりと忘れていたいもんだよ」とヨーアヒムは答えた。「しかし、まだ痰が出るんでね」と言った彼は、なげやりに、しかもはげしく肩をすくめたが、そのしぐさは彼には似合わなかった、そして彼は、夏外套の従弟のほうへ向いた脇ポケットから、何やら半分ほど引き出して見せたが、すぐまたしまいこんでしまった。それは扁平で彎曲した青いガラスの壜で、金属製の蓋がついていた。「これは、僕たちこの上の連中がたいていい持っているものなんだ」と彼は言った。「これにはまた僕たちだけの呼び名があってね、まあ、あだ名なんだが、とてもおかしな名だよ。まあ景色でも見るかね？」

ハンス・カストルプは景色を見た、そして、「雄大だなあ！」と言った。

「そう思うかい？」とヨーアヒムはたずねた。

馬車は、鉄道と平行に走っている幅の不規則な道を、谷の軸にむかってしばらく伝っていたが、それから狭軌の線路を左へ横切って、流れをひとつ越えると、こんどはゆるやかな上りの車道を、森につつまれた斜面にむかって走ってゆく。その斜面の低く突き出て芝草に蔽われた台地の上に、正面を西南に向けながら長く延びた建物があって、円塔をいただいている。この建物は無数のバルコニーを張り出しているので、遠くから見ると海綿のように孔だらけに見えたが、ちょうどいま明りをつけはじめていた。あたりが急にたそがれてくる。一面の曇り空にしばらく生彩を添えていた淡い夕焼けが早くも色あせてしまって、あたりの自然は、すっかり暮れはてる直前の、あの白けた、生気のない、もの悲しいような変り目の状態に支配されていた。人家を点在させて、いくらかうねり気味に長く延びた谷間には、いま、いたるところに明りがついた、谷底にもついたし、両側の斜面にも点点とついた、――右側の出張った斜面にはとくに明りの数が多かったが、そこには人家が階段状に上まで並んでいたのである。左手は、芝草に蔽われた斜面を小みちが幾筋か這いのぼって、どんよりと黒ずんだ針葉樹の森のなかに消えていた。谷は出口のほうへ狭まっていって、その向こうに遠く見える山々の肌は、味気ないスレート色に青ずんでいた。風が吹きだしていたので、夕方の冷気が身にしみてきた。

「いや、正直に言うと、あまり圧倒的な景色でもないね」とハンス・カストルプが言った。「いったい、氷河とか、万年雪をいただく山巓とか、壮大な巨峰というやつはどこにあるんだい？　いま見えるのは、どれもこれもそれほど高くないように思えるんだがね」

「いや、どうして、みんな高いんだよ」とヨー

アヒムは答えた。「見たまえ、ほとんどいたるところに樹木限界があって、木が生えなくなっている。その限界線が驚くほどはっきりと引かれているだろうが。赤針樅がおしまいになると、それで何もかもおしまいになる。終わりというわけだ。ごらんのとおり、岩ばかりさ。向こうのシュヴァルツホルン、ほら、あのとんがった山だ、あの右手には氷河もあるんだよ、そら、青くなったところがまだ見えるだろうが？　大きなものじゃないが、ちゃんとした氷河で、スカレッタ氷河というんだ。あの隙間にあるピーツ・ミヒェルとティンツェンホルン、ここからでは見えない山だが、そこにはいつも雪が積っている、一年じゅうだよ」

「永遠の雪だね」とハンス・カストルプが言った。

「うん、永遠と言ってもいい。とにかく、どうしてみんなえらく高いんだよ。しかし、僕たち自身が恐ろしく高いところにいるんだから、それを考えてみなくちゃ駄目だ。海抜千六百メートルなんだよ。だから、高いものだって高く見えないわけさ」

「うん、大した登りだったからね！　白状するが、僕は不安なこわい気がしたよ。千六百メートルか！　計算してみると、ほぼ五千フィートだね。いままでこんな高いところへ来たことはないなあ」そう言ったハンス・カストルプは珍しそうに、まだ馴染のない空気を、試しにひと息深く吸ってみた。空気はさわやかで――ただそれだけであった。香りも中味も湿り気もなく、軽くはいってきて、心に何も伝えなかった。

「すばらしいよ！」と彼はお世辞を言った。

「そうだろう、評判の空気だからね。それはそうと、この辺の景色はこん晩はあまりいいほうじゃない。ときどきもっといい眺めになるんだよ、ことに雪景色はね。しかし、ひどく見飽きしてくるよ。僕たちこの上の者は、ほんとの話、みんなうんざりするほど見飽きている」と言ったヨーアヒムは、いかにも飽き飽きしたというように口をゆがめたが、その表情も誇張した自制のないもののように思われて、やはり彼には似合わなかった。

「君はひどく変なものの言い方をするね」とハンス・カストルプが言った。

「僕が変な言い方をするって？」と、ヨーアヒムはすこし心配そうなようすでたずねながら、従弟のほうへ顔を向けた……。

「いや、いや、しっけい、ちょっとそんな気がしただけなんだよ」とハンス・カストルプは急いで言った。しかし、彼は、ヨーアヒムがもう三度も四度も使った「僕たちこの上の者」という言い回しが、なんとなく気がかりで妙な感じがするので、そのことを言うつもりだったのである。

「僕たちのサナトリウムは、ごらんのとおり、街より高いところにあるんだ」とヨーアヒムは話しつづけた。「五十メートル高いんだよ。案内書には『百』となっているが、じつは五十メートルしかないんだ。一番高いところにあるのは、あの向こうのシャツアルプというサナトリウムだが、ここからは見えない。そこでは、冬になると道が通れなくなるから、二連橇で死体を下へおろさなければならない」

「死体って？　ああ、そうか！　いやはや！」とハンス・カストルプは叫んだ。そして突然、彼は笑いだしたが、どうにも抑えようのないはげしい笑いで、そのために胸がゆすぶられ、冷たい風ですこしこわばっていた顔がゆがんで、しかめ面になって、軽くひりひりと痛んだ。

「二連橇でか！　そんな話をしながら君はまたいかにも平然たるものなんだな？　この五カ月のあいだにずいぶん犬儒的になったよ！」

「シニックなもんか」とヨーアヒムは肩をすくめながら答えた。「どうしてシニックなんだ？　運ばれ方なぞ死体にしてみればどうだって同じことじゃないか……。とにかく、この僕たちのところじゃあ、シニックになりかねないよ。ベーレンスにしてからがもうシニックの老大家なんだからね、――おまけに愉快な男で、学生組合の先輩で、手術の名人らしいが、君にも気に入るだろうと思う。それからクロコフスキーという助手がいて――これはなんとも恐るべき代物だ。案内書にもとくにこの男のやることが書いてある。つまり、患者たちの精神分析をやるんだよ」

「何をやるんだって？　精神分析かい？　そいつは願いさげだな！」と叫んだハンス・カストルプは、もうすっかり笑いの気分に負けてしまった。そして、どうにもその気分を抑えることができない。いろんな話の末に精神分析が出て

きて、彼は完全に降参させられたのである。あまり笑ったせいで、前かがみになって眼を抑えていた彼の手の下から涙がこぼれ出た。ヨーアヒムも心から笑った――笑うのがいい気持らしかった――、というようなわけで、最後には並足になった馬車が、急勾配の、環状になった車寄せを登りつめて、国際サナトリウム「ベルクホーフ」の正面玄関に青年たちを送りとどけたとき、彼らは大変な上機嫌で馬車から降りることになったのである。

第三十四号室

すぐ右手の、玄関の扉と風よけとのあいだに門衛の詰所があった。そこで電話のそばに腰をかけて新聞を読んでいたフランス人型の小使が、停車場に来ていたあの跛の男と同じ灰色の仕着せ姿で彼らを出迎えて、明るい照明の広間を通って案内した。広間の左側には談話室が並んでいる。通りすがりにハンス・カストルプはそのなかをのぞいて見たが、いずれもがらんとしていた。いったいお客はどこにいるのかとたずねる彼に、従兄はこう答えた。

「安静療養をやっているんだよ。僕は、きょうは君を出迎えるので外出させてもらったわけさ。いつもなら僕も夕食後はバルコニーで寝ているんだがね」

すんでのこと、ハンス・カストルプはまたも笑いに圧倒されるところだった。

「なんだって、君たちは夜も霧のなかで寝るのかい？」と彼は笑いによろめくとでもいうような、よろよろ声でたずねた……。

「そうだ、規則だからね。八時から十時までだよ。だが、まあ、君の部屋を見たまえ、そして手を洗うといいだろう」

彼らがエレベーターに乗ると、その電気装置をフランス人型の小使が動かした。するすると引きあげられながらハンス・カストルプは眼をぬぐった。

「あんまり笑ったせいで、力が抜けてぐったりしたよ」と言った彼は、口で息をした。「君からずいぶんおかしな話ばかり聞かされたんでね……。精神分析の話には恐れ入った、あれはひっこめておいてもらうんだったよ。それに僕はやはり旅の疲れがすこし出ているらしい。君もこんなに足が冷えるかい？　それでいて顔はとても熱いんだから、いやな気持だよ。食事はすぐだろうね？　どうも腹が減ったようだ。いったい、この上の君たちのところではちゃんとしたものが食えるのかい？」

彼らは狭い廊下に敷いた椰子莚の上を足音も立てずに進んでいった。乳色ガラスの丸蓋が、天井から青白い光を落としていた。ラックのような塗料を塗った壁が白く、固い感じで光っていた。白い帽子をかぶって、鼻にかけた鼻眼鏡の紐を耳のうしろに垂らした看護婦の姿が、そのあたりに見えた。明らかに、彼女はあまり職務に忠実でない新教の看護婦で、好奇心が強く、退屈に悩まされてそわそわしているものらしかった。廊下の二カ所、白いラックを塗った番号つきのドアの前の床に、フラスコとでもいうような、腹のふくれた頸の短い大きな容器が置いてあったが、その用途をたずねることを、ハンス・カストルプはさしあたり忘れていた。

「ここだよ」とヨーアヒムが言った。「三十四号室だ。右隣りは僕で、左はロシア人の夫婦、――これがすこしだらしのない騒々しい連中なんだがね、どうにもほかにしようがなかったんだよ。で、どうだね、この部屋は？」

ドアは二重になっていて、そのふたつのドアのあいだに着物をかける掛け釘がとりつけてあった。ヨーアヒムがすでに天井の電燈をつけていたので、そのふるえるような光のなかに、白い実用的な家具と、やはり白くて丈夫な、洗濯のきく壁掛けと、清潔なリノリウムの床と、近代趣味の簡素で気のきいた刺繍をほどこしたリンネルのカーテンなどをそなえた部屋が、明るくのどかに照らし出されていた。バルコニーへ出るドアが開けてあって、谷の燈火が見え、遠くからダンスの音楽が聞こえてきた。親切なヨーアヒムは、小さな花瓶に数本の花をさして、それを用箪笥の上にのせておいてくれた、――それはいま二番咲きの草のなかに見あたるもので、ノコギリ草がすこしにフウリン草が二、三本だったが、ヨーアヒムが自分で斜面からつんできたのであった。

「ほんとにありがとう」とハンス・カストルプは言った。「気持のいい部屋だなあ！　ここなら二、三週間ぐらい愉快に暮らせるよ」

「一昨日、ここでアメリカの女が死んでね」と

ヨーアヒムが言った。「ベーレンスはもう、君が来るまでにはその女が片づくだろうし、そうなったら君にこの部屋を使ってもらえるだろう、と言っていたんだ。その女には婚約者というのが附添っていて、イギリスの海軍士官なんだが、軍人らしいしゃんとしたところのあまりない男だった。しょっちゅう廊下へ出てきては泣くんだよ、まるで子供さ。泣いたあとで頬にコールド・クリームをすりこんでいたが、ひげの剃りあとに涙がしみて、ひりひりしたんだよ。一昨日の晩、そのアメリカ娘は二度も猛烈な喀血をして、それっきりになってしまった。しかし、彼女は昨日の朝にはもう運び出されてしまって、そのあとここはもちろん徹底的に消毒された。フォルマリンを使ったんだが、これは消毒にはじつによくきくんだってね」

ハンス・カストルプは興奮した放心状態でこの話を聞いていた。袖をまくりあげて、ニッケルの栓が電燈の光できらきら光っている大きな洗面台の前に立った彼は、清潔なシーツをかけた、白塗りの金属製のベッドをちらと見やったばかりであった。

「消毒したって、そいつはすてきだ」と、彼は手を洗ってふきながら、べらべらとまくし立てたが、すこし調子はずれなところがあった。「そうさ、メチルアルデヒト、これにかかっちゃどんなに強いバクテリヤだって参ってしまう、——H_2COだ、しかし、鼻をひりひりさせるねえ？　もちーろん厳重至極の消毒が根本条件さ……」ヨーアヒムは学生時代から世間普通の言い方どおりにしていたのに、ハンス・カストルプは「もち」と「ろん」とを離して「もちーろん」と言うのだった、そして彼は大いにまくし立てながらしゃべりつづけた、「僕の言いたかったことは……。どうもその海軍士官は安全剃刀で剃っていたと思うんだよ、あれで剃ると、よく研いだ剃刀であたるよりもむしろ怪我をしやすいんだからね。すくなくとも僕の経験ではそうだ。だから僕は両方をかわりばんこに使っている……。そら、刺戟された皮膚に塩水をつけると当然ひりひりするね、それで彼は海上勤務の経験からコールド・クリームを使いつけていたんだよ、僕は何も不思議がることはないと思うな……」それからも彼はしゃべりつづけて、マリア・マンチーニ——という愛用の葉巻——を二百本も鞄に詰めてきたとか、——税関の検査がいかにも寛大だったとかいう話をして——故郷の人々からの挨拶を伝えていたが、突然、「ここじゃスティームを通さないのかい？」と叫びながら、スティーム管のところへ走りよって、それに手を当てた……。

「通してないよ、ここじゃかなり温度をさげておくからね」とヨーアヒムは答えた。「八月に暖房装置の火をいれるには、もっと気候が変化しなくちゃならない」

「八月かい、これで！」とハンス・カストルプは言った。「僕は寒いよ！　恐ろしく寒い、と言っても身体だけだがね、顔は変にほてっているから、——ほら、ちょっとさわってみたまえ、燃ゆるがごとしだ！」

他人にむかって、自分の顔にさわってもらいたいなどと言うのは、全然ハンス・カストルプの性に合わないことで、彼自身が情ない思いをした。ヨーアヒムもそれには取り合わないで、ただこう言った。

「それは空気のせいだよ。なんでもないんだよ。ベーレンスでさえ一日じゅう青い頬をしている。どうしても慣れないという人だって多いからね。さあ、行こう、でないと何も食いものにありつけなくなる」

廊下では例の看護婦がまた姿を現わして、近視の眼で物珍しそうに彼らのほうをうかがっていた。しかし二階に来たとき、ハンス・カストルプは、まったくそっとするような音を聞いたために、縛られたようになって、突然立ちすくんでしまった。それはすこし離れた廊下の曲り角の向こうから聞こえてきたのである。高くはないが、じつにいやらしい性質の音だったから、ハンス・カストルプは顔をしかめながら眼を大きくして従兄を見やった。それはたしかに咳だった、——男の咳だった。しかし、ハンス・カストルプがこれまでに聞いたどの咳にも似ないもので、実際の話、この咳とくらべたら、彼の知っている咳はどんな咳でも、健康ですばらしい生命の発現であるように思われた、——これはなんの喜びも愛情もない咳で、普通のようにちゃんと押し出されてくるのではなく、どろどろに分解した有機体のなかをぞっとするほど力なく掻きまわすとでもいうような音であった。

「うん」とヨーアヒムは言った、「悪いらしい

ね。オーストリアの貴族なんだがね、優雅な人で、まったくアマチュア騎手に生まれついたとでもいうような人なんだ。それがいまではあんなことになっている。しかし、まだ歩きまわっているよ」

彼らがふたたび歩きだしてからも、ハンス・カストルプはアマチュア騎手の咳のことを熱心に話しつづけるのであった。「まあ、考えてもみたまえ」と彼は言った、「あんなのはまだ聞いたことがなかったんだからね。まったく初めてだよ。だから、当然、印象を受けるわけさ。咳にもいろいろある、乾いたのや、締まりのないのや。そして、一般に言われているところだと、締まりのない咳のほうがむしろまだましで、吠えるのよりは性質がいいんだそうだ。僕も若かったころ（彼は「若かったころ」と言った）咽喉炎になって、狼みたいに吠えたことがあるが、それが締まりのない咳になったときには、みんなが喜んでくれたよ。いまでもそれを覚えている。しかし、いま聞いたような咳は初めてだよ。すくなくとも僕にとってはね、――あれはもう全然生きた咳じゃない。乾いてもいないし、締まりがないとも言えないし、そんな言葉ではもうとても言いあらわせない咳だ。まるでそんな咳をする人間の身体のなかをのぞきこむような気がするよ、そこがどんなになっているかとね、――何もかもどろどろの泥んこなんだ……」

「おや、おや」とヨーアヒムは言った、「僕は毎日あれを聞いているんだよ、何も君から説明してもらうことはないさ」

しかし、ハンス・カストルプはいま聞いた咳をいつまでも気にして、あんな咳を聞くとまるでアマチュア騎手の身体のなかをのぞくような気がするよと、幾度もその断言をくり返すのであった、そして、ふたりがレストランにはいっていったとき、旅疲れのした彼の眼は興奮の輝きを帯びていた。

レストランで

レストランは明るくて、上品で、気持がよかった。それは広間のすぐ右手にあって、談話室と向かい合いになっていたが、ヨーアヒムの説明によると、到着したばかりで時間外に食事をする人や、来客のある人などに主として利用されていた。しかし、誕生日や、さし迫った退院や、また、総診の結果が良好だった場合なども、ここではなやかに祝われるのであった。ときどきこのレストランで盛大な宴会がおこなわれて、シャンパンが抜かれることさえある、とヨーアヒムは言った。いまは三十歳くらいの婦人客がただひとりいるだけで、彼女は何か本を読んでいたが、それと同時にぶつぶつひとりごとを呟いては、左手の中指で絶えず卓布を軽く叩いていた。青年たちが席を取ると、彼女のほうでは席を変えて、彼らに背を向けてしまった。あの婦人は人間嫌いなんだ。それでいつも本を読みながらレストランで食事をする。なんでもまだ小娘のころにサナトリウムへはいって、その後世間へ出たことがないとかいう噂だよ、とヨーアヒムが小声で説明した。

「それじゃあ、五カ月の君なんか、彼女にくらべたらまだほんの駈出しというところだね、かりに一年辛抱したところで、やはり駈出しだね」とハンス・カストルプは従兄に言った。ヨーアヒムは、以前の彼にはなかった例の肩すくめの癖を返事のかわりにしながら、献立表に手を伸ばした。

彼らは窓際の一段高くなったテーブルに席を占めていたのだが、それは一番の上席であった。クリーム色のカーテンのそばに向かい合って腰をかけたふたりの顔は、赤い蓋をかけた電気スタンドの光にあかあかと照らされていた。ハンス・カストルプは洗ったばかりの手を組み合わせて、いつも食卓についたときにするしぐさなのだが、楽しそうに待遠しそうに両手をもみ合わせていた、――これはおそらく彼の祖先が食前にお祈りをした遺伝かもしれない。黒い服に白いエプロンをかけて、いかにも健康そうな色の大きな顔をした、鼻にかかったものの言い方をする愛想のよい娘が給仕をした、そして、ハンス・カストルプは、ここでは給仕の女たちを「広間の娘さん」と呼んでいるのだと教えられて、大いにおかしがった。ふたりは給仕の娘にグリュオー・ラローズをひと壜注文したが、ハンス・カストルプはその葡萄酒の温度が適当でないと言って、彼女をもう一度取りにやった。食事はすばらしかった。アスパラガスのスープと、詰め物をしたトマトと、いろいろな添え物

を盛り合わせた焼肉と、特別上手にこしらえた甘い物と、チーズと、果物とが出た。ハンス・カストルプは、初め思ったほどには食欲のないことがわかったが、それでも盛んに食べた。彼には、腹が減っていないときでも、自分を敬うという気持でしこたま食う習慣があったのである。

ヨーアヒムはどの料理にもあまり手をつけなかった。彼は、料理には飽き飽きしている、と言った。この上の人たちはみんなそうなんだ、そして食事に難癖をつけるのがしきたりになっている、来る日も来る日も永遠にここにすわるんじゃあね……。そう言うかわりに彼は、葡萄酒のほうは満足そうに、いや、心を傾けるとでもいうようにして飲んだ、そして、感情に走りすぎるような言葉遣いを用心して避けながら、幾度もくり返して、話らしい話のできる相手が来てくれたのでうれしい、と言うのであった。

「ほんとに、君が来てくれてすばらしいよ！」と彼は言ったが、その持ち前ののんびりした声に感動がこもっていた。「まったくの話、僕にはひとつの事件と言えるよ。なんと言ってもひとつの変化だからね、――つまり、この永遠の、無限の単調のなかの一段落、ひとつの区切りというものなんだよ……」

「しかし、もともと、ここじゃあ時間がさっさと早く過ぎてゆくんだろう」とハンス・カストルプが言った。

「早いとでも遅いとでも、なんとでも言えるよ」とヨーアヒムは答えた。「むしろ時間の経過というものがないと言いたいね、ここのはまったく時間というものじゃない、それにまた生活でもないんだ、――いや、生活じゃないよ」と彼は頭をふりながら言って、ふたたびコップを手に取った。

ハンス・カストルプも飲んだが、いまは顔がもう火のようにほてっていた。しかし、身体のほうは相変らず寒くて、手足には、うれしいような、それでいてどこか悩ましいような、妙な落着きのなさが感じられた。言葉が口から急いで出すぎるようなぐあいで、彼はたびたび言い違いをしたが、払いのけるような手振りをして、言い違いにはかまわずに話をつづけた。ヨーアヒムも打ち興じた気分になっていた、そこで、何か呟いたり卓布を叩いたりしていた例の婦人が急に立ちあがって、出ていってしまうと、彼らの話はますます自由に快活にはずんでいった。彼らは食べながらフォークを使って身振りをしたり、ひと口頬張ったままでもったいぶった顔をしたり、笑ったり、うなずいたり、肩をそびやかしたり、まだよく物を呑みこまないうちからもう話の先をつづけたりした。ヨーアヒムはハンブルクの話を聞きたがって、エルベ河改修工事計画のことに話を持っていった。

「画期的な工事さ！」とハンス・カストルプは言った。「わが国航運界の発達にとって画期的な工事、――と言ってもけっして言いすぎはしない。市は緊急臨時支出として五千マルクの予算を計上したが、もちろん、ちゃんとした成算があってのことだと信じてもらいたいね」

とにかく彼は、エルベ河改修工事をすこぶる重要視したくせに、すぐまたその話題から離れて、ヨーアヒムに、「この上」の生活や客たちのことをもっと話してもらいたいと頼んだ。その希望は喜んでかなえられた。ヨーアヒムも話をして気を軽くすることのできるのがうれしかったからである。彼は、二連橇の走路をおろされてゆく死体の話をくり返して、それがほんとうの話だということをもう一度はっきりと断言しなければならなかった。ハンス・カストルプがふたたび笑いにとりつかれると、ヨーアヒムも笑って、心から笑いを楽しんでいるらしかった、そして、この盛んな笑いに油を注ぐために、ヨーアヒムはほかにも何かと滑稽な話をして聞かせた。たとえば――僕の食卓仲間の婦人にシュテール夫人というのがいる。カンシュタットの音楽家の細君で、まあかなり重症らしいんだが、――こんな教養のない人間にはいままでお目にかかったことがない。消毒のことを「ちょう毒」と言うからね、――それも大真面目でさ。それから、助手のクロコフスキーのことを、代診のつもりで「代珍」と呼ぶ。こちらは顔をしかめないで、それをうけたまわっていなければならんのさ。それに彼女は金棒引きなんだ、もっともこの上の連中はたいていそうなんだがね、で、彼女はもうひとりのイルティス夫人という婦人が短刀を持っているという陰口をきいて、「短刃」を持っていると言う。「短刃とくるからね、――なんとも処置なしだよ！」というような話である。椅子の背に身をのけぞらして、半

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com